

---

# エッセーと幽霊

あれっくす

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エセーと幽霊

### 【Nコード】

N6232V

### 【作者名】

あれつくす

### 【あらすじ】

どこにでもありそうな恐らく一般的なエッセイです。ふつつか者ですがどうぞよろしくお願いします。なんか変なあらすじになってしまった。

## このエッセイを執筆するにあたって

僕がこのエッセイを書こうと思い立つたきっかけは村上春樹先生のエッセイに魅了されたからだ。差し当たり全くオリジナルの作品になることはない。と思う。

と言うのも僕は彼以外のエッセイを読んだことはないし、これから読むこともない。内容自体は僕が考えるが文体はほぼゴーストライターである。気が向いたら直そうと思うがそれまではこのまま書くことにする。たぶんその方が読みやすい。

読みやすいと言えば最近流行っているケータイ小説というものはとても読みやすい。読んだことのない人は試しに読んでみてください。とても読みやすいです。この読みやすさというのは内容よりもレイアウトから来るものだと僕は思う。このジャンルの小説は改行が多く空行も沢山ある。空行無しの文章では字が詰まり過ぎて読みにくい。僕は昔人間だから字が詰まっていたってお構いなしに読むけど、若い人には空行があった方が読みやすいんだろうね。きっとそれに合わせて僕も空行を増やそうと思ったけど、めんどくさがりなので出来そうもない。出来る人はちよつと羨ましいです。

あと口語で書かれた地の文も重要だと思う。文語より口語の方が読みやすいのは至極である。普段使っている言葉なのだから当たり前だ。これは一般小説にも言えるかもしれない。

今時の主流は口語である、と言ってみる。偉大な人の言葉でありそうだと。僕は偉大じゃないけどね。

このエッセイを執筆するにあたって（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

## 夏について

夏休みが貰えるのはほとんど高校までで、大学に行くと夏休み中も働くし社会人になっただら盆以外に休みはない。高校の間でもバイトで夏休みのない人間がいる。

夏は儚い。若いうちは海に行けるしバーベキューも出来る。時間があるからだ。年を取るにつれてだんだんとその時間は無くなっていく。社会の歯車になったとき思うだろう。なぜあの時遊んでおかなかったのだろうと。

例えば七十になって海には行けない。いくことは出来ても泳げない。バーベキューも出来ない。出来たとしても食べられない。年寄りに脂はきついのだ。

だから私は人生最後の夏を満喫したかった。十七もしくは十八で人生最後なのだ。

考えてみれば人生なんて短いものだ。戦後に生まれた私は戦時中の事は全く想像の域を出ないが、それが怒ってからまだ百年も経っていない。体験した人間がまだ生きている。

日本が統一されてから四百年とちょっとしか経っていない。まだこないだのことだ。たった四百回の夏を越したただけなのだ。だが私は三桁も夏を越せない。

悲しいことだ。もう新世紀を祝うことはないし、青い猫型ロボットの夢見る事もない。

不死について考えたことがある。

私は理系の人間だからそれについて客観的に論じることが出来る。人が不死になることはあり得ない。ここでは根拠を割愛するが生物学的にはほぼ不可能だ。脳以外のほとんどの器官はすぐ替え可能だが肝心の脳がそれでは意味がない。

しかしもっと簡単な方法、理系を離れた方法で不死を目指すことができる。理系の考え方では脳だけ生きながらえればそれで不死だ。

思想を残すのだ。その点で考えればキリストは不死だと言えるし、他の教祖も全て不死だ。そして普通の人間にも不死に慣れるチャンスはある。本を書くのだ。もちろんただ売れるだけのベストセラーや自己満足の自費出版などではない。

後世まで伝わるような作品を残すことが不死に繋がるのだ。例えば夏目漱石や太宰治を知らぬ者はいない。その作品も幅広く読まれていて共感する者も多いだろう。その共感こそが不死なのだ。

と、ここまで夏についてはほとんど触れてこなかったが、つまり夏なんてどうでも良いと言うことなのだ。

## 読書について

春から夏にかけて本を四十冊ほど読んだ。全部文庫本で借り物やもらい物ではなく買ったものだ。ずいぶん買ったなあと思う。今も自分の横で読んで欲しそうにしている。

一度読んだら読まない本がほとんどの中、まれに何十回も読んでいるものがある。こんなに読んでよく飽きないなあとは思うが手元にあると読んでしまう。それが何の本かは言えないが本の魔力は恐ろしい。

昔、文体に困ったことがあつてある作家さんの文体を真似てみた。その頃はホラーを特に読んでいてそれ以外は書けないと思つていた。文体を真似るとき何度もしたのが、本読んでもある所　大体自分が本に入り込めたと思ひ始めたちよつと後くらい　までいくと本を閉じパソコンに向かう。そうすると割と似通つた文体になることが多い。だから私がホラーを書いているときはホラーを読んでいるし文学を書いているときは文学を読んでいる。あいにくファンタジーはメジャーな作品がわからないため読めていない。従つて私が書くファンタジーはファンタジーではない。

### 閑話休題。

しかし、これは行き過ぎるととても恐ろしい。雰囲気だけでなく表現まで一緒になつてしまうとこれは間違いなく盗作疑惑が生まれる。でもそうやって盗作で騒がれる作家さんたちが羨ましくもある。たぶん私の作品なんて誰も読んでいないのだから盗作をしても気付いてくれないのだ。

例えばこのサイトで文学、エッセイの短編を書いたとしてもかなりの実力と知名度がない限りランキングにはあがれないだろう。まづジャンルがマイナーだ。しかしそれはただの甘えでしかない。

ジャンル別ランキングがあるからだ。しかし残念ながら文学、エッセイのジャンルのトップ十、その中でも入りやすい日刊、週刊は

いつも同じ作家さんたちの名前が書いてあつて入ることが出来ない。  
相当力のある人たちなのだろうと思う。私なんかどうあがいても  
追いつけないのだろう。ああいう人は読書の量が私なんかと比べて  
倍以上に多いはずなのだ。

やっぱり読書は大事だと思う。



## 写真について

写真は嫌いだ。ここで言う写真とは集合写真である。特に主だったエピソードはないがとにかくあまり好きではない。魂を抜かれるとかそういう思想を持っているわけでもない。

写真に意味はあるのだろうかと考えたとき私は意味は無いと思う。大抵の人間が写真を撮る理由は忘れたくない瞬間だとか残しておきたいことを忘れないためであろう。しかし仮に写真を撮っていないかっただとしてそれを忘れることがあるのだろうか。いつかは忘れると思うがそれは所詮その程度の記憶だったのだ。忘れたくない記憶、忘れてはいけない記憶は残り続ける。それは写真ではなく文字としてかもしれないし口伝としてかもしれないが確実に残るのだ。

逆に写真を撮ることで安心しきってしまい忘れてはいけないことを忘れるかもしれない。やっぱり私は写真を撮りたくない。写真に撮れないことも覚えていたいし覚えていなければならぬ。そして忘れない。

写真に写せるものと写せないものでは写せないものを選びたい。昔本で読んだことがある。内容は上手く言い表せないが確かに私の考え方を変えた文章だった。とりあえず写真は撮らないことにした。

写真が嫌いな理由はもう一つある。写りがあまり良くないのだ。それについては元が悪いだけだが、ポーズを取るのも苦手だったりする。なぜ写真を撮るだけにいちいちポーズを取らなければならぬのか。あれはとても面倒だし恥ずかしい。なるべくなら避けたい。たぶん撮る側には滑稽に映っているだろう。と言うわけで写真の中の私はポーズを撮っていなかったりする。それが私の最良なのだ。

## 探し物

特に書くことがないので今回は探し物について書くことにする。

私はよく物をなくす。今も、ほんの数秒前に読んだエッセイを探している最中だ。ちなみに前回の探し物は二十六分前で、今探しているエッセイを探していた。本の山から見つかった。

こんな具合に私はかなり頻繁に物をなくすのである。人間はよく物をなくすのである、と一般化したいところではあるが私以外の探し物事情には詳しくないのでそうは書けない。もしわかる人がいるんなら速やかに教えて欲しいと思う。

探し物をするとき、まず始めに考えるのは前回使った、もしくは見かけた場所だ。しかし、それをするのは無意味だとわかっている。だって、その方法で見つけられた試しがない。そもそも、その記憶が正しいなら探し物なんてしなくていい。物をなくした 記憶を辿った 見つけた これでいいのだ。その論理で行くなら数秒前に読んだ本が見つからないわけがないじゃないか。

ものを探すのには極めて核心的な最高の方法がある。探し物のベテランである私はそれを見つけた。

存在の否定、つまり、もともとなかったことにすればいいのだ。

これは最も低コストな最良案だ。探し物に労力を使うなんてばかげている。時間もかかる。挙げ句、見つからないこともある。

誤解しないで欲しいのが、これは私の持論であり一般化はされていないと言うことである。世の中には一切探し物をしないで済む人もいるし、すぐに見つけられる人もいる。そういう人間に生まれたかったなあ、と思う。

最後に。

どなたか本探し手伝ってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6232v/>

---

エセーと幽霊

2011年10月19日21時16分発行